

Title	オンライン授業におけるグループワークの試み：薬学部2年生を対象とした「情報科学」の経験から
Author(s)	幡生, あすか; 上田, 幹子
Citation	大阪大学高等教育研究. 2021, 9, p. 69-76
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/79444">https://doi.org/10.18910/79444</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# オンライン授業におけるグループワークの試み： 薬学部2年生を対象とした「情報科学」の経験から

幡生 あすか<sup>\*1</sup>・上田 幹子<sup>\*1</sup>

## A trial of group work in online classes: Information Science for second-year students of the School of Pharmaceutical Sciences

HATABU Asuka<sup>\*1</sup>, UEDA Mikiko<sup>\*1</sup>

大阪大学では、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、2020年度春・夏学期の授業を原則メディア授業で実施する事となった。そこで著者らが夏学期に本学薬学部2年生を対象とした授業「情報科学」において実施したオンライングループワークの取り組み事例と今後の課題について報告する。グループワークの課題は「架空の政策について、利点と欠点を挙げ、政策の導入に賛成または反対の意見をまとめる」とし、3種類の架空の政策を準備した。受講生90人を15グループ（6人1組）に分け、1グループが1つの課題についてディスカッションする事とした。1回90分の授業2回を充て、1回目はグループワーク、2回目は総合討論とした。大阪大学授業支援システム（Collaboration and Learning Environment: CLE）のグループ機能、Blackboard Collaborate Ultra、およびZoomを利用した。教員2名とティーチング・アシスタント7名がグループワークのファシリテーターを務めた。グループワークでは、多くのグループが画面共有やチャット機能を利用していた。また、一部のグループではCLEのファイル交換機能を利用していた。グループ人数とグループ数のバランスは、対面授業での経験を基に決めたが、オンラインに適したグループ構成やスタッフ配置について検討が必要と考えられた。

キーワード：薬学教育，オンライン授業

To prevent the spread of COVID-19, classes at Osaka University were mainly administered online during the spring and summer terms of 2020. In this paper, we report on examples of online group work in the Information Science classes for second-year students of the School of Pharmaceutical Sciences as well as future issues, with the theme of such work is “to list the advantages and disadvantages of fictitious policies and to conclude opinions for or against the introduction of these policies.” We prepared three fictitious policies. The 90 participants were divided into 15 groups (one group of six people), and each group discussed one fictitious policy. The two 90-minute lessons were dedicated to group work and presentation and discussion, respectively. We used a Collaboration and Learning Environment (CLE), Blackboard Collaborate Ultra (BCU), and Zoom, and two faculty members and seven teaching assistants acted as facilitators. In the group work, many groups used screen sharing and chatted in the BCU, and some relied on the file exchange of the CLE. We decided to balance the number of group members and groups based on the experience in face-to-face classes; however, it might be necessary to consider group composition and staffing of instructors and teaching assistants suitable for online classes.

Keywords : Pharmaceutical education, Online class

---

所 属：<sup>\*1</sup>大阪大学大学院薬学研究科

Affiliation：<sup>\*1</sup>Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Osaka University

連絡先：ashatabu@phs.osaka-u.ac.jp（幡生 あすか）

## 1. 背景

### 1.1 オンライングループワークを実施した経緯

大阪大学（以下、本学）では、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、春・夏学期はメディア授業を主体とした授業を実施した。そこで、著者らは、本学薬学部2年生を対象とした授業「情報科学」（以下、本授業）<sup>1)</sup>において、オンラインでグループワークを実施した。

本授業は本学の薬学教育において、次の1.2-1.3の一部を担っている。

### 1.2 本授業の目的

本授業のシラバスで提示した学習目的は、以下の3点である。これらの学習目標は、薬学教育モデル・コアカリキュラム<sup>2)</sup>（以下、コアカリ）のSBO（specific behavioral objective）と対応している。

- 1) チームとして問題点に取り組み、グループで話し合い、その結果をまとめ、発表の準備を行う。
- 2) 医療に関わる諸問題から、自ら課題を見出し、それを解決する能力を醸成するとともに、チーム医療の意義を体感する。
- 3) 医療の担い手として、社会のニーズに常に目を向け、対応する方法を提案し、ふさわしい態度を習得する。

### 1.3 薬剤師として求められる基本的な資質

コアカリ<sup>2)</sup>では、6年卒業時に必要とする、10の「薬剤師として求められる基本的な資質」を定めている。その中でも本授業は、「コミュニケーション能力（患者・生活者、他職種から情報を適切に収集し、これらの人々に有益な情報を提供するためのコミュニケーション能力を有する.）」および「チーム医療への参画（医療機関や地域における医療チームに積極的に参画し、相互の尊重のもとに薬剤師に求められる行動を適切にとる.）」の基盤を身に付けることが期待されている。

### 1.4 本授業の設計と実践

そこで前述した1.2, 1.3の達成を目標に本授業を設計し、実施することとした。中でも、学生がコミュニケーション能力を身に付け、チームとして問題に取り組む姿勢をもつためには、授業内に他の受講生とコミュニケーションする機会を設ける事が重要と考えた。

これまでも、6年制薬学教育では、様々なアクティブ・ラーニングの実践が報告されている<sup>3, 4)</sup>。本学薬学

部においても、グループワークの導入や授業ツールの開発を通じて、授業のアクティブ・ラーニング化を試みてきた<sup>5)</sup>。しかし、これらは対面授業における実践であり、グループワークをオンライン授業として実践したのは初めての試みとなった。

コロナ禍での教育については、医学・歯学・薬学領域全体でも関心が集まっている。「医学教育」では、2020年6月に77編の実践報告からなる特集（「パンデミック下の医学教育—現在進行形の実践報告—」）が組まれた<sup>6)</sup>。さらに10月には、「コロナ禍における医療人育成」と題して、歯学、薬学、看護学、理学療法・作業療法の各領域の取り組みが紹介された<sup>7)</sup>。

また、コアカリでは、「選択的な大学独自のカリキュラムの設定」として、「薬剤師業務の医療現場でのニーズの変化や医療の国内外の動向に対応、あるいはそれらを取捨する事も重要である」<sup>2)</sup>とされている。そこで、これらの動向や先行報告を参照し、本授業では新型コロナウイルス感染症に関わる課題をディスカッションの課題として取り上げる事にした。

本報告ではオンライングループワークの取り組み事例として設計・実施した授業の内容や方法を紹介し、今後の課題について考察する。

## 2. 方法

本論文で取り上げる「情報科学」は春・夏学期に開講される2単位の演習科目である<sup>1)</sup>。2020年度を受講生は90人であった。全15回のうち夏学期の4回分の授業（1回90分）を担当し、そのうち2回を、オンラインによるグループワーク及び総合討論として実施した。「情報科学」は生命系、計量科学系、PBL系の3つの系から構成されている<sup>1)</sup>。いずれの系もティーチング・アシスタント（TA）の支援のもと、受講生を少人数グループに分けて実施している。今回担当したPBL系では、グループで討論する事を通して、与えられた課題やテーマに潜む問題点を発見し、解決を試みる事を目的としている。

このように、本授業は「グループで討論する事」が目的として記載されており、該当するコアカリの学習目標を達成するためにも、グループワークは必須であると考えられた。そこで、準備期間やスタッフの人数といった制限はあるものの、受講生を少人数のグループに分け、双方向的なやり取りができる授業環境を設計し、グループワークを実施すべきであると考えた。

また、先に授業が実施された生命系、計量科学系では

Zoomや大阪大学授業支援システムCLE (Collaboration and Learning Environment) が用いられており、受講生がそれらのオンラインシステムにある程度習熟していると考えられた。そこで、CLE、BCU (Blackboard collaborate Ultra) 及びZoomを利用し、オンラインでグループワークを実施する事を計画した。

授業（グループワーク及び発表）を通じて、受講生に身に付けることを期待した事は、次の3点である。

- 1) チームとして問題点に取り組み、グループで話し合い、その結果をまとめ、発表の準備を行うこと。
- 2) 医療に関わる諸問題から、自ら課題を見出し、その解決方法を考案・提案すること。
- 3) 医療の担い手として、社会のニーズに目を向け、対応する方法を提案すること。

表1に授業スケジュールを示す。

表1 授業スケジュール

実施日	スケジュール	内容
6月30日	課題提示	架空の政策および事前課題の提示各自、事前課題をCLEより提出(提出メ切7月3日) BCUの使い方を確認しておくよう連絡
7月7日	グループワーク	
	所用時間(分)	内容
	30	趣旨説明, グループ分け
	60	グループワーク グループの代表者が、発表資料、グループワーク記録シートをCLEより提出
7月14日	総合討論	
	所用時間(分)	内容
	10	出席確認、発表・質疑応答のスケジュール、進行方法の説明
	25	架空の政策1について5グループが発表、質疑応答
	25	架空の政策2について5グループが発表、質疑応答
	25	架空の政策3について5グループが発表、質疑応答
	5	まとめ
		各自、授業後課題をCLEより提出(提出メ切7月21日)

CLE: Collaboration and Learning Environment, BCU: Blackboard collaborate Ultra

## 2.1 グループワークの課題及び授業の準備

グループワークの課題は、「架空の政策について、利点と欠点を挙げ、政策の導入に賛成または反対の意見をまとめる」とし、架空の政策を3つ用意した(図1-A)。

また、受講生向けにBCUのアクセス方法、および

グループワークで使用すると考えられる機能(スピーカー、マイク、チャット機能など)について簡単にまとめた資料を作成し、CLE上の授業ページに掲載した。あわせて本学サイバーメディアセンターが作成している「受講生向けBlackboard collaborate Ultraの利用について」<sup>8)</sup>を確認するよう連絡した。

グループワークにあたり、CLEのグループ機能を用いてあらかじめグループ分けを行った。

1グループあたりの人数は、我々が過去に対面で実施したグループワークの経験に基づき、6人とした。これは、90人のクラス全体で総合討論を行うため、1グループあたりの人数を減らしてグループ数を増やすと、1グループあたりの発表時間が短くなること、先にTAの人数が決まっていたため、グループ数を増やすとTAがグループワークを十分サポートできなくなる事を憂慮した結果でもある。佐藤らの、グループの人数は学生3~6人がベストである<sup>9)</sup>という記述からも、妥当な人数であると考えた。

## 2.2 オンライン授業に使用したシステム

本授業では、CLE、BCU、Zoomの3つのシステムを使用した。

CLEは受講生への連絡事項や課題の提示と提出に使用した。BCUはグループ毎のディスカッションに使用した。BCUはCLEと連動して使用できるオンライン会議システムである。CLEのグループ機能では、グループ毎に使用できるBCUのリンクが作成される。

Zoomはグループワークに際して、何らかの理由でBCUにアクセスできない受講生がいた場合のバックアップに使用した。教員およびTAがそれぞれZoomのルームを作成し、CLE上にルームID及び入室パスワードを掲示した。また、受講生にZoomの使用経験があること、グループワーク時に一部の受講生からBCUで音声がかえなかったという連絡を受けたことから、総合討論は全てZoomを用いて実施した。

## 2.3 授業のタイムテーブル

まず第1回の授業の1週間前(6月30日)に事前課題(図1-B)を課した。事前課題は各受講生が個別に実施する個人課題である。課題の設問は大阪大学授業支援システムCLE上にワードファイルとして掲載し、解答を記入したファイルをCLEを通じて提出するよう指示した。

第1回の授業(7月7日、グループワーク)は、最初



### グループワーク 課題（架空の政策）

1. 政府が、胎児への影響を考慮し、妊娠中の人に対して、アルコール含有飲料、カフェイン含有飲料、煙草の販売を禁止する。
2. 政府が、感染症の拡大を防止するため、市民の外出や都市間の移動を制限し、違反者に対して罰金を科す。
3. 政府が、子どもの健康への影響を考慮し、16歳未満の子どもに対して、砂糖を多く含む飲料の販売を禁止する。

図 1-A グループワーク課題（架空の政策）

### 事前課題（個人課題）

- Q1 この政策の利点を列挙してください。（科学的な根拠を含めること）
- Q2 この政策の欠点を列挙してください。
- Q3 この政策が導入された場合に最も困るのは、どのような立場の人だと思いますか。  
あなたの考えを記載してください。
- Q4 あなたはこの政策を導入する事に賛成ですか、反対ですか。  
( ) 賛成 ( ) 反対 ( ) 決められない

※Q5～Q7は選択問題です。Q4の回答により回答する問題が変わります。

- Q5 Q4に「賛成」と答えた方は、政策を導入するに際し、Q3で挙げた人々が困らないよう、どのような対策を取りますか。あなたの考えを記載してください。
- Q6 Q4に「反対」と答えた方は、この問題に対して、あなたであれば、どのような対策を取りますか。あなたの考えを記載してください。
- Q7 Q4に「決められない」と答えた方は、決められなかった理由を記載してください。  
(例えば、〇〇という情報が不足しているので決められない、など。)
- Q8 この課題を実施するにあたり、参考にした情報（資料）を列挙してください。

図 1-B 事前課題

### グループワーク課題（グループ課題）

- 最初に、Q1-Q6について、個人ワークの結果をグループで共有してください。  
グループで話し合い、GW0～GW3について、報告資料をパワーポイントで作成してください。
- GW0 最初の 賛成/反対/決められない の票数
- GW1 Q1, Q2について、特に重要だと思われる利点（欠点）をそれぞれ3つ挙げてください。
- GW2 Q4 について、グループで意見をまとめてください。さらに、「賛成」を選んだグループはQ5、「反対」を選んだグループはQ6 についてグループの意見をまとめてください。  
(必ず、どちらかの意見を表明すること)
- GW3 GW1, 2で意見をまとめるにあたり、気をつけたことがあれば記載してください。

図 1-C グループワーク課題

### 授業後課題（個人課題）

- (1) 自分のグループ以外で印象に残った発表をひとつあげて、その理由を簡単に書いてください。
- (2) グループワーク、発表を通じて、印象に残ったことを教えてください。
- (3) 授業の感想や授業に対する意見などがあれば教えてください。

図 1-D 授業後課題

図 1 提示した架空の政策および課題

にコース用のBCUに全受講生を集め、全体へグループ課題(図1-C)の説明を行った。その後、受講生はグループ毎のBCUへ入室し、グループワークを行った。具体的には、最初に各個人が実施した事前課題の内容をグループ内で共有し、その後、グループとしてひとつに意見をまとめた。グループ毎にまとめた意見に基づき発表資料を作成した。発表資料はグループの代表がCLEから提出した。

さらに発表資料と別に、グループワーク記録シートを作成する事とした。グループワーク記録シートは、発表資料には含めなかった情報も残し、議論の過程が分かるような記述を心掛けるよう求めた。

グループワーク実施中は、ティーチング・アシスタント(TA)が1名あたり2~3グループを担当し、出席状況の確認および議論の進行補助を行った。

第2回の授業(7月14日、総合討論)はZoom上で実

施した。教員が作成したZoomのルームに全受講生が入室した。発表者は発表時にマイクをオンにすること、カメラはオン/オフいずれでもよいとした。総合討論後、授業後課題（図1-D）を課した。授業後課題は事前課題と同様個人課題とし、ワードファイルで課題をCLEに掲示し、直接ワードファイルに回答を記入してCLEを通じて提出する事とした。

## 2.4 成績評価

成績評価は、提出された課題（事前課題、発表資料、グループワーク記録シート、授業後課題）及び授業への出席に基づき行った。

## 3. 結果

### 3.1 グループ分け及び授業の準備

BCUは教員・TA共使用経験に乏しかったため、あらかじめ教員とTA有志でBCUの接続を確認した。Zoomは研究室のゼミで使用経験があったため、授業にあたり特に事前の確認等を行わなかった。

グループの人数について、授業の感想や授業に対する意見を確認したところ、1グループあたりの人数（6人）はちょうどよいという意見が多かった一方で、少ない人数（4人）の方がよいという意見もあった。

また、TAから、複数グループの意見を同時に聞くのは難しいという意見があった。

### 3.2 授業の構成及び使用したシステムの状況

授業の計画としては、全体説明は10分程度とし、残り80分でグループワークを行う予定であった。しかし第1回（グループワーク）は、全体説明の時に、教員が誤ってコースルームと授業用セッションという2種類のルームを開いていたために受講生が2つのルームに分かれて入室する事態を招いた。そのため、全員に当日の流れを説明するのに手間取り、全体説明30分、グループワーク60分という時間配分となった。その他は大きな予定の変更はなく、実施できた。授業の配信は研究室の居室で実施した。この時、教員3名とTAのうち4名（著者らの研究室に所属する学生）は同一の部屋で個別のPCを用いてBCUにアクセスした。そのため、全体説明のトラブルや授業内の質問への対応の一部は、スタッフ同士は対面で連絡を取る事で対応した。しかしながら実際には、第1回の授業で用意した質問用のZoomを利用した受講生はいなかった。

授業内に生じた問題として、第1回ではBCUで音声がかたかたというものが数件あった。また、第2回でも、Zoomで一時的に発表者の音声が聞こえづらくなる現象が生じた。その他は特に問題は生じなかった。カメラは多くの受講生がオフにしていた。

### 3.3 グループワーク、発表の実施状況

グループワークの実施状況として、まず、3.1に述べた通り、グループワークの時間を当初の予定より短縮して60分となった。しかし、ほとんどのグループは授業時間内に課題を完成させることができた。

全体発表で使用したパワーポイントによる発表資料は、第1回の授業で各グループが作成したものを教員側で編集して1つのファイルにまとめたファイルを用いた。これを教員側で画面共有する事により画面を切り替える時間を省いた。また、グループ課題のうち、GW1（架空の政策の利点/欠点）は、複数のグループが類似の意見を記載している例が散見された。そのため、教員側であらかじめ類似の意見は集約・抜粋して資料を作成した。意見の集約・抜粋にあたっては、各グループから少なくとも1つ以上の記載を抜粋するよう努めた。

発表に際して、一部のグループに発表時間の短縮（簡単に話してもらおうよう要請）を促した。これは、教員側で集約・抜粋して発表したGW1の内容を、グループの発表者が詳しく話した事により発表時間の延長が見られたためである。同一の課題を担当した5つのグループが発表した後、受講生同士の質疑応答を行った。いずれの課題も、受講生同士の活発な質疑応答があった。最後に、グループを担当したTAから短時間の質問やフィードバックを行った。結果として、概ね時間内に15グループの発表と質疑討論を終えることができた。

### 3.4 課題の実施状況

受講生90人中87人がメ切り日までに個人課題を提出した。個人課題でのQ1の回答は偏りがあり、いずれの政策も反対の意見が多数であった。また、全てのグループでグループとしてまとめた意見は、グループ内の多数決の結果と一致していた。

グループワークで意見をまとめるにあたり、気をつけたこととして、「全員が意見を出した」「全員の意見を共有した」という記述がみられた。また、「なるべく多くの意見を吸い上げるようにした」「様々な視点に立って考えてみた」など、多様な視点から検討を行った様子が伺えた。

## 4. 考察

本報告では、著者らが夏学期にオンラインで実施したグループワークについて紹介した。本項では、授業の準備、オンライン授業で使用したシステム、授業のタイムテーブル、成績評価についてそれぞれ考察する。

また、グループワークの課題を設定するにあたり、サンスティーンらのナッジに関する研究<sup>10,12)</sup>に着想を得た。この課題設定の背景を、4.5で述べる。

### 4.1 授業の準備について

著者は以前に行った対面授業で5グループの議論を机間巡視しながら支援していたので、1人のTAが2~3グループを同時に担当し、ディスカッションの支援を行う事は可能だと考えていた。

3.1の結果から、オンライングループワークでは、

1) グループは少人数かつ役割が明確になっている事が望ましい、2) スタッフは対面授業に比べてクラス全体を俯瞰する事が困難である事が示唆された。

グループ内で役割を担当する人が最小4人(司会1名、書記2名、発表1名)であったことから、1グループ4人であれば、全員が何かの役割を担当する事になる。その一方で、グループ数が増えるため、同人数のスタッフで実施した場合、各スタッフの負担は大きくなると考えられる。

今回、グループあたりの人数とグループ数のバランスは、授業方法とデザインに関する書籍<sup>9)</sup>や、これまでの対面授業での経験を基に決めた。したがって、オンラインに適したグループ構成やスタッフ配置についても、更なる情報収集と検討が必要である。ただし、これらは著者らの体験に基づく振り返りであり、対面とオンラインの違いだけでなく、スタッフ側の慣れの差等にも起因する可能性がある。

また、グループごとに、ファシリテーターとなる教員あるいはTAを割り当てる事ができず、グループワークの進行を各グループに任せる形式となった。

そこで、受講生だけでもグループワークが円滑に進められるよう、1) グループワークの課題を具体的に示す、2) 最初に全員が事前課題の内容を発表することにした。

また、与えられた問題(政策)から自分達で課題を見出す際の参考として、Q5~Q7を設定した。特にQ3でその政策の問題点を考え、Q5で自ら見出した課題に解決策を示す形にした。提出された課題を確認したところ、Q5を回答したグループは、Q3の結果を踏まえ、具

体的な解決策を示していた。したがって概ね授業目標に沿った適切な課題設定ができたと考えられた。

### 4.2 オンライン授業で使用したシステムについて

今回、オンライン会議システムとしてBCUとZoomの2つを利用した。BCUの利点は、ルームへ参加する受講生の範囲をCLEのグループ機能と連動して設定できる事、また、教員がグループワークの時間にミーティングルームを立ち上げることなく利用できる事である。そのため、あらかじめ課題について説明し、グループワークのスケジュールを受講生に任せるといった使い方も可能であろう。これは、同一のグループで複数回の授業を通じてグループワークを行う場合に、便利だと考えられる。一方、BCUではZoomに比べ、音声がかきこえない、あるいは聞こえづらいという状況が多く生じた。さらに受講生からはZoomの方が慣れているという意見があった。したがって、今回のような単回のグループワークではZoomを使用するほうが適していた可能性がある。また、先行研究においても、学生がZoomのルームを作成してグループワークを実施したという報告<sup>13,14)</sup>もある。特にコリーはディスカッションが時間内に終わらない場合、学生が自主的にグループワークを実施していた<sup>14)</sup>と報告している。本授業では、教員が主体になってBCUやZoomの準備を行った。受講生のオンライン会議システムに対する習熟状況を確認した上で、受講生が主体となってグループワークの計画を行う事も可能であろう。それぞれのシステムの活用方法や使い分けについて、今後も実践を通じて検討したい。

### 4.3 授業のタイムテーブルについて

全体説明に際して教員側の不手際があり、ディスカッションの時間が予定より短くなった。しかし、多くのグループが授業時間内にグループ課題を完成させていた。

事前に個人課題を実施する事により、短時間で効率よくディスカッションができたのではないかと考えられる。

全体発表は、発表の時間が足りなくなったグループがあった。これは、発表の流れの周知が不十分であったことが原因のひとつだと考えられる。今回のように時間あたり発表するグループが多い場合に円滑な全体発表を行う工夫として、1) 発表の形式を早い段階で予告しておく、2) グループワークの最後に、予行演習としてグループ内で時間を測って発表練習を行う課題を追加する、等が対策として考えられた。



#### 4.4 成績評価について

まず、事前課題を提出した受講生は、いずれかの意見を表明していた。さらに、グループワーク後に提出されたまとめの課題では、15グループ中14グループで、集計結果が報告されていた。したがって、ほとんどのグループで、構成員の、賛成・反対・決められないの意思確認を行ったであろうと推測される。

これらの結果から、学習目標のうち「チームとして問題点に取り組み、グループで話し合い、その結果をまとめ、発表の準備を行う」という学習目標は概ね達成できたと考えた。いずれのグループもグループとして、賛成・反対いずれかの立場を表明した上で、グループワークの課題に回答していたことから「医療に関わる諸問題から、自ら課題を見出す事」「医療の担い手として社会のニーズに目を向ける事」ができたと考えられた。また、個人で考えた意見をグループで共有し、共に問題に取り組む姿勢が見られたと考えられる。

今回は、シラバスの学習目標のうち、「チーム医療の意義を体感する」「ふさわしい態度を習得する」は評価できなかった。また、採点は減点方式で実施したが、ルーブリック評価を導入するなどしたほうが、学習目標に沿ったグループワークが実施しやすくなったのではないかと考えられる。

#### 4.5 グループワークの課題設定について

グループワークの課題は、サンスティーンらの研究<sup>10-12)</sup>に着想を得た。これは、ナッジ<sup>15)</sup>に対する世界各国の国民の賛否を調査した研究である。参加者は「あなたは次に示す架空の政策に賛成ですか、反対ですか」という質問に対して「賛成」または「反対」の2択で選択した<sup>10-12)</sup>。新型コロナウイルス感染症に関連して、海外では都市間の移動を制限した国も多く<sup>16)</sup>、国内のニュースでも「ロックダウン」という言葉が取り上げられた<sup>17)</sup>。そこで、感染症拡大防止を目的とした都市間の移動制限を「架空の政策」のひとつとした。

グループワークの課題を「架空の政策」とする点で、サンスティーンらの研究<sup>10-12)</sup>を参考にしたが、サンスティーンらの研究とは異なり、今回の授業で設定した架空の政策は、全て人々に対して何らかの制限を課すものであり、ナッジではない。今回の授業では、これら架空の政策に対して反対の立場から発表資料をまとめたグループが多かった。また、一律の禁止には反対だが、一律ではない何らかの制限を設ける事を提案する意見があった。今回は架空の政策をシンプルなものにするため

に一律の禁止としたが、今後は、賛成・反対に意見が分かれ、様々な立場から議論できるよう、課題設定を見直したいと考えている。さらに、複数のグループから教育や呼びかけによって、個人の自主的な行動を促す代替策が提案された。そこで、総合討論のまとめとして、「ナッジ」<sup>15)</sup>と「健康の自己責任論」<sup>18)</sup>を取り上げた。「ナッジ」の事例として、サンスティーンらの研究<sup>10)</sup>および、手洗い・消毒を促すナッジに関するニュース<sup>19)</sup>を紹介した。「健康の自己責任論」は、グループの意見で、政策に反対する際の代替策として、情報を提供するという意見が複数寄せられたことから、「正しい情報が得られれば、正しい判断と行動ができるのか？」という問題提起を意図して取り上げた。グループの発表において活発な質疑応答が行われたため、まとめの時間は5分不足であった。そのため、今回は受講生に上記の意図を伝えきれなかった可能性がある。

本学薬学部では、1年生～6年生まで、様々な授業でグループワークを導入している。機会があれば、「健康の自己責任論」を、セルフメディケーション（自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること）<sup>20, 21)</sup>と共に、グループワークの課題として取り上げてみたい。

### 5. まとめ

本報告ではコロナ禍におけるオンラインによるグループワークの取り組み事例として、我々が設計・実施した授業について紹介し、今後の課題について考察した。

我々にとってオンラインでグループワークを行うのは初めての試みであった。そのため、グループワークの課題設定、授業スケジュール等をオンラインで実施できるよう新たに作成した。授業は大きな問題無く終了し、学習目標も概ね達成できたと考えている。実施時期が6月末～7月と、受講生がZoomや他のオンラインツールの使用に慣れていた事も幸いした。一方で、グループ分けやスタッフの配置の方法は、オンライン授業特有の工夫が必要と考えられた。さらに、サンスティーンらの研究成果<sup>10-12)</sup>を踏まえて、健康・医療に関する架空の政策をグループワークの課題とする事も試みることができた。こうした新たな授業手法や、課題設定の試みは今後も続けたいと考えている。

今回は受講生へのアンケート調査等は実施できなかったため、今後は受講生へのアンケート調査等も行い、グループ設計やスタッフの配置、グループワークの課題に



ついて、学生のニーズや成果を元に、より工夫を行って  
いきたい。

受付 2020.10.4 / 受理 2021.1.12

## 謝辞

授業の準備・実施にご協力いただきました、教員・  
TAの皆様に感謝いたします。

本報告の一部は、JSPS 科研費 JP19K16446 の助成に  
より実施しました。

本報告の一部は、第5回薬学教育学会で発表しました。

利益相反の開示

開示すべき利益相反なし

## 参考文献

- 1) 大阪大学. 大阪大学学務情報システム (KOAN) 外部公開シラバス「情報科学」シラバス (2020年度). [https://koan.osaka-u.ac.jp/syllabus\\_ex/campus?view=view\\_syllabus.ex.refer.shozoku&func=function.syllabus.ex.refer.initial&s\\_code=13](https://koan.osaka-u.ac.jp/syllabus_ex/campus?view=view_syllabus.ex.refer.shozoku&func=function.syllabus.ex.refer.initial&s_code=13), 2020年12月6日参照.
- 2) 薬学教育モデル・コアカリキュラム平成25年度改訂版, 薬学系人材養成の在り方に関する検討会. 平成25年12月25日.
- 3) 細畑圭子, 金美恵子, 恩田光子, 岩永一範. Information and Communication Technology (ICT) を活用した Small Group Discussion (SGD) におけるピア評価の試み. 薬学教育. 2018 ; 2. doi:10.24489/jjphe.2017-022
- 4) 矢野玲子. 金城学院大学薬学部における屋根瓦方式 pbl チュートリアル教育. 薬学教育. 2018 ; 2. doi:10.24489/jjphe.2018-008
- 5) 幡生あすか, 上田幹子. ファカルティ・ディベロップメントでの学びと薬学教育におけるその実践: アクティブ・ラーニングと授業設計に注目して. 大阪大学高等教育研究. 2020 ; 8 : 33-39.
- 6) 特集 パンデミック下の医学教育—現在進行形の実践報告一. 医学教育. 2020 ; 51 (3): 198-375.
- 7) 特集 コロナ禍における医療人育成. 医学教育. 2020 ; 51 (5): 521-583.
- 8) 大阪大学サイバーメディアセンター. 受講生向け Blackboard collaborate Ultra の利用について. <https://www.cmc.osaka-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/05/4863d84fab31f4c9a4b0ae9bd005fac.pdf>, 2020年12月6日参照.
- 9) 佐藤浩章 編. 大学教員のための授業方法とデザイン. 玉川大学出版部. 2010. p21
- 10) Sunstein CR, Reisch LA, Rauber J. A worldwide consensus on nudging? Not quite, but almost. Regulation & Governance. 2018; 12: 3-22.
- 11) Sunstein CR, Reisch LA, Kaiser M. Trusting nudges? Lessons from an international survey. Journal of European Public Policy. 2019; 26: 1417-1443.
- 12) キヤス・サンスティーン+ルチア・ライシュ著. 大竹文雄監修. 遠藤真美訳. データで見る行動経済学 全世界大規模調査で見えてきた「ナッジ (NUDGES) の真実」. 日経 BP 2020.
- 13) 近藤猛, 高見秀樹. 錦織宏. オンライン臨床実習にも転用可能なオンライン PBL の実践教育. 医学教育. 2020 ; 51 (3): 276-278.
- 14) コリー紀代. 看護計画立案時の認識変容を促す条件抽出法を用いた遠隔グループワーク. 医学教育 2020, 51 (5): 561-563.
- 15) Thaler RH, Sunstein CR. Nudge: improving decisions about health, wealth, and happiness. Rev. expanded ed., Paperback, Penguin, New York, 2009.
- 16) BBC NEWS JAPAN. 【図表で見る】封鎖される世界 新型コロナウイルス対策に各地で行動制限. 2020年4月9日. <https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-52217073>, 2020年12月6日参照.
- 17) NHK. WEB特集 ロックダウンとは実際どうなの? 2020年4月2日. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200402/k10012362181000.html>, 2020年10月2日参照.
- 18) 津川友介. 世界一わかりやすい「医療政策」の教科書. 医学書院. 2020. pp209-212.
- 19) NHK. ビジネス特集 新型コロナ より響く“呼びかけ”とは? 2020年4月22日. <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200422/k10012400211000.html>, 2020年12月6日参照.
- 20) 厚生労働省. セルフメディケーション税制 (特定の医薬品購入額の所得控除制度) について. <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000124853.html>, 2020年12月6日参照.
- 21) 日本薬剤師会. 「セルフメディケーションについて. <https://www.nichiyaku.or.jp/activities/self-medication/index.html>, 2020年12月6日参照.